



ある「基礎学力の向上」話

まずは次の文章(対談)をお読みください。ある地区の教育者の対談です。

高橋 ことしの本町教委のたてた教育目標には第 1 に「基礎学力の啓培」をとりあげた。これは簡単にいうと国語, 算数に十分な力をいれてほしいということだ。

山瀬 学校では児童生徒の心身の発達段階に応じた基礎的なものをつかんでやっている。国語, 数学には「基礎指導配当表」をつくり, 月々毎週その配当表によって進めている。どの学校でも書取大会とか, 計算テストなどを行って向上につとめている。

橋本 基礎学力の低下ということは全国的な傾向だろう。この向上には復習と予習が絶対大切だ, 学校の授業を真剣にやることは勿論だが, 家庭で予習, 復習を必ずするというしつけをつけてほしい。

滝尻 子供が家へ帰ってから勉強しやすい環境におかねばならぬ。家庭で「何時から何時までは勉強時間だ」と決めてこの時間は子供も外へ遊びに出ず, 親達も用事をいいつけないということに児童生徒会と PTA で決めたいものだ。(後略)

高橋さんは町教育長, 山瀬さん・橋本さんは町立中学校校長, そして滝尻さんは町立小学校校長です。

さて, それではこの対談記録はいつ頃のものだと思いますか?

次の中から選んでみてください。

- ア 今年
- イ 2～5年ほど前
- ウ 10～20年ほど前
- エ 50年ほど前
- オ 50年よりはるかに前

文章表現がちょっと現代風でないので古そうな感じがしますが, 話されている内容は, 最近の「基礎学力を重視しよう」というものと似ています。

実は上記の文章は, 旧能都町発行の『広報・能都第 2 号』(昭和 33 年 5 月 15 日発行)に「基礎学力の向上^マえ」と出して掲載されたものの冒頭の一部です。4 月末に行われた「教育座談会」が元になっているそうです。もう 50 年以上も前のことです。

編集子の放談(だと思って読み飛ばしてください)

こうして読んでみると, 「今も昔も学校教育って変わっていないんだなあ」って思います。

この 50 年間, 現場も行政もそれなりに努力はしたのだらうけれども, **肝心の部分**をぬきにしてあーだこーだといっても何も変わらないんですね。

子ども達にとって**学びがいのある内容**は何かを発見し, 意欲的にそれを取り上げて教えていかないといけないうです。教科書に出ているから…ということのみで, どれだけ学校で反復練習を繰り返そうが, 家庭で一斉に勉強時間を作ろうが, 今後もまた数年後に同じようなことが持ち上がってくるのだと思います。

どうも, 「やらなきゃいけない」と思ってあせっているのは大人たちだけのようです。子ども達にとって

は「学習させられる」という強制でしかないのでしょうか…残念です。

もともと、大人たちが一致団結して「基礎学力の向上を！」とやっているときは、たぶん、少しは効果が上がるのだと思います。

しかしそうやってついた「学力」ってどんな学力なのでしょう？

「効果」があったように見えたのは、単に、子どもたちが「一致団結した大人たち」に反発できないだけでは…と勘ぐりたくもなります。そうすると「自ら学ぶ力」なんてついていないのかも知れません。自ら学ぶ力のつかない「学力」は「学力」とは呼べませんよね。

「歴史から学ばなければならない」というあたりまえのことをもう一度考えてみませんか。

今私たちがやっていることを、先人たちがやってみて既に失敗しているのなら、別の方法をとるのが当然だと思うのです。

宿題を大切にしてきた先生もたくさんいたし、お残りをして勉強させた先生もたくさんいます。私も夏休みにまで呼んで学校で勉強させたこともありました。そして、それは親からも感謝される行為でした。

しかし、それでも子ども達は「学びから逃げています」(佐藤学氏の著書に『学びから逃走する子どもたち』というのがありましたね)のが現状なのです。

どう考えたって「リトマス紙の色を覚えること」や「メダカの雄雌の見分け方を覚えること」が基礎学力だとは思えません。ところが「教科書に出ているから」というだけで一生懸命教える。子どもたちにとっては、「色の変化をする物質があるのだ!」「雄雌がいないと卵はかえらないんだ!」という<驚き>よりも「赤、青」「背びれの違い」を覚えることだけが頭に残る…そんな教育をしてきたと自省する毎日です。

子どもたちにとって生きて使える「基礎学力」とはなんのでしょうか？

理科なら、雑多な知識は必要ないのでしょうか？

「割り算の筆算」を素早く処理できることは、基礎学力でしょうか？

「手紙の書き方」を身につけるのは基礎学力でしょうか？

メールのやり取りの仕方は？

小学校4年生くらいまでの内容はすべて「基礎学力の一部」という気がしますが、それ以後は…

「そんなことも分からないで今年度の研究してきたの?」といわれそうですが…

いつもいつも自問しています。

そう、自問清掃ならぬ、自問教育です。